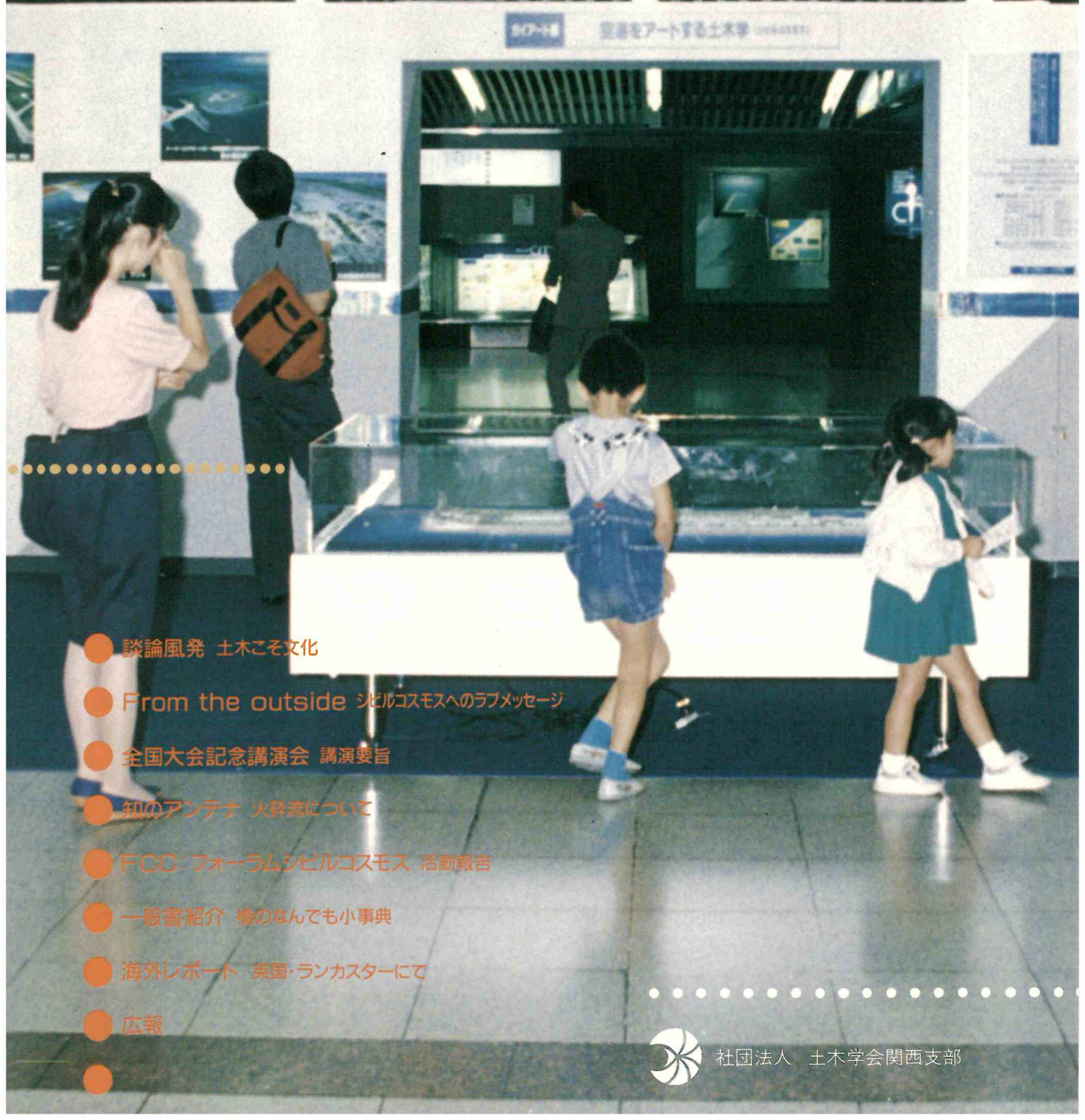


# 及野だまり

No.40 1991.12



- 談論風発 土木こそ文化
- From the outside シビルコスモスへのラブメッセージ
- 全国大会記念講演会 講演要旨
- 知のアンテナ 火砕流について
- FCC:フォーラムシビルコスモス 活動報告
- 一般書紹介 橋のなんでも小事典
- 海外レポート 英国・ランカスターにて
- 広報
- 



■シビルコスモスへのラブメッセージ  
 ガイアート展担当プロデューサー  
 岡村 真知子

この度、土木学会全国大会の市民対象展示会の企画を担当させていただきましたが、女性市民の目から見た土木・建設業界の印象を織りまぜながら、メッセージを送りたいと思います。

### 1. 3Kの中のロマンチスト

本年9月に開催されたガイアート展では、土木界の皆様が手掛ける作品（仕事）である建設構造物の完成模型や工事現況、また、それらの完成予想図をパネルで紹介し、ビデオではその作品の工事記録や概要の紹介をしましたが、企画を実施へと進めていく中で皆様方と打ち合わせをしているうち、それぞれの方が3Kと言われる中で自分の夢を実現させていく情熱を持ち、完成したときの達成感、自分の手掛けた作品が公共の用に供される姿を見ての満足感を気持ちの拠りどころとしている大変なロマンチストなのだ感じられました。

土木の世界は、構想から完成まで全工程を1人で担当するのではなく、その過程においていろいろな分野の人達と作業を分担し、共同で新しい技術を研究・開発していく。また、政策的・戦略的に計画をたて、未知の領域と対峙しながら施工し、完成に向けて成し遂げていくという技術・智恵が結集した幅広い分野にまたがる世界であり、その壮大さに驚くばかりです。

土木の世界で働く人々は、情熱を持ち壮大な

夢に立ちむかう、まばゆいばかりのロマンチストではないでしょうか。

### 2. 枠から抜け出す第1歩となったガイアート展

私は、映像や展示・イベントのプロデュースを担当していますが、作る側（見せる側）の意識として、自分が第1番目の見る側の立場になって、見た人がおもしろいか、見た人がわかりやすいか、見やすいか、と考えることを原点とし、どうしたら一般の人々をひきつけることができるかと発想の見直しをしています。

映像メディアのあふれる世界に住み慣れた現代人は、完成した物を静止した状態で見ると美術館タイプの体験ではあきたらなくなっています。

そこで、作り手には、ドラマのように移り変わっていく姿を見せるとか、自分をその場に置いて体験した気にさせるとか、自分だけがそれを知っている気にさせるなど様々な手法（表現方法）の工夫が必要になってきています。

しかし、どんな手法をとっても、その企画と実施する目的や意義は同じステージでつながっていかなくてはならないのです。そのようなことを考えあわせながら、企画を構成していくわけですが、特に今回のガイアート展では、土木技術者の夢や仕事を、多くの人々に伝える事で土木の大切さや必要性を理解してもらい、ひいては土木界の底辺を広げるという目的がありました。そこで、インパクトがあるだけで終るよ

【プロフィール】

㈱電通ブロックス 大阪支社 制作本部  
 スペース制作部 プロデューサー  
 京都成安女子短期大学 意匠科 プロダクトデザイン  
 卒業

(最近の主な作品)

- 瀬戸大橋博覧会岡山 中国銀行「遊ing館」
- 堺ダッハランド NTT「3Dファンタジーシアター」
- 花の万博 ゴールデンベルパビリオン  
 咲くやこの花館 人権コーナー

り、長いスタンスで考え、次のステップへの布石となるような展開で実施するのが良いという判断のもとに、枠にはまったと見えるかもしれない手がたいものになったのはいたしかたないと思います。しかし、ロマンチストが沢山おられる土木界です。次のステップではきっと、「あっ」と驚くことをやってくださるような気がしています。

3. シビルコスモスの輝き

未来ある土木界のこれからのためにメッセージを送るとすれば……。

土木の仕事の魅力は、1つは健康的な汗をかける仕事であり、時には歴史的な瞬間に自分を置くことができ、自分の眼で確かめることができる仕事であり、とてつもなく大きなものを作りあげる、壮大な仕事であると思います。

そのスケール感・達成感を広く一般にもっと身近かに、実感として感じてもらうことが必要だと思います。

最近、建設中のビルの中でコンサートをするというようなイベントもあったようですが、子ども達はあの大きなショベルカーとかトラックとかが大好きです。大人でもちょっと触れてみたいものがいっぱいありそんな工事現場は宝島ではないでしょうか。そんな宝島を1日開放するのはどうでしょう、子ども達は興味や感動から芽ばえたシビルコスモスの小さな芽を大切に育

ててくれるかもしれません。

例えば、建設現場の目隠しの仮囲いはずししてショーウィンドウのようにして、日々の変化を日常の中でつぶさに見せるというのはどうでしょう。

専門的な技術も眼のあたりにすると先進性をアピールすることにもなります。そこで力強く働く人々も出演者です。オープンな形で建設現場を見てもらう、つまり自分達のやっていることを、周囲に情報として伝えていくことによりかたくるしく言うと、啓蒙していくことによって理解を深め、感動を伝えることも可能になると思います。

シビルコスモスに魅力を感じて、訪れ、住まう人達が増えるように、情報の輝きを放つような活動を続けられることを祈ります。





全国大会の市民参加行事の一環として実施された記念講演会の講演要旨を紹介します。

「外国人からみた日本の交通」

国際交通セミナー館長

ユッタ・クライバウム

クルマのつくり方や扱い方、クルマとの付き合い方にはその国の文化が色濃く反映し、クルマの走らせ方、他の交通のパートナーとの関係の持ち方、交通施設の作り方などにも、文化の違いが見られます。私が日本の街を歩いて、歩き方やクルマの走らせ方から最初に持った強い印象は、日本人というのはなんと「せっかち」な民族だろうということです。

また、「日本にはプリンシプルがない」、つまり原理原則がない、あるいは、原理原則がわからないと言われることがあります。日本はファジィな社会です。これは日本人が、原理原則を持つことや、合理的な議論よりも、集団のまとまりや仲間との「和」を大切にしているからでしょう。しかし、このような集団主義で動く社会は、おとなしい、穏やかな社会ですが、「甘えの社会」でもあります。私もこの国に住むようになって、それを強く感じます。

子供や自転車は、交通では「弱者」です。そ

の弱者を守ることは、弱者を甘やかすことではありません。ますます複雑になる交通社会の中で、どのような交通行動を取るのかが安全で、どうすれば自分を守るのか、ということを実体的にきちんと教えて、厳しく実行させること、それが弱者を守ることに繋がると思います。その点、日本では、やや弱者に甘すぎるのではないのでしょうか。甘えや過保護の社会は、自己責任の自覚に欠ける弱い人間を生み出します。日本の交通社会では、他人に迷惑をかけないで、自分の行動には自分で責任を持つという意識が、ドイツに比べて弱いように思います。

日本のドライバーは、他の交通のパートナーのことを、あまり考えていない行動が多いと思います。また、法律や規則に定められた以上の積極的な安全行動はしないという傾向があります。日本人は、他人の迷惑行為についてはじっと我慢する代わりに、他人を助ける積極的行動に欠けるところがあると思います。今後、日本の交通文化を高めていくために必要な対策は、社会性尊重の意識をしっかりと植え付けるとともに、甘えの社会構造を見直して、自己責任の自覚を促すことではないのでしょうか？

日本は、アジアで唯一の先進国です。そのような意味でも、21世紀の交通社会をリードするような、安全で快適な交通文化を生み出していただくように期待しております。



## 「21世紀の社会構造」

評論家

田原 総一郎

ソ連の8月政変が起きる前に、テレビの取材でソ連へ行きました。その目的は、「ゴルバチョフは失脚する」というタイトルの番組を作成することでした。取材が終わって、帰国した翌日にクーデターが本当に起きてしまいました。ペレストロイカを始めたゴルバチョフが、ペレストロイカと言いながら、世の中を変えたいと言いながら、本人が世の中をどう変えるかということが、わかっていなかったのではないかと思います。人は、応々にして、世の中が変わる時というのは、そのまん中にいる人は、その変化に気が付かないものだと思います。

今、日本の経済は「利益率第一主義」から、「売り上げ第一主義」になってきています。大きな売り上げを得るために、大口の客には利益率が低くても、あるいは赤字になっても、商売をします。この赤字は、小口の客から補っています。また、売り上げを大きくするために、架空口座が出現することになります。これは、正しい商売の仕方ではありません。今、問題になっている損失補填も、日本の産業構造の柔軟性から出てきたものであります。このような、日本のやり方は「経済学」というルールに沿った方法でなく、日本流の「指導」と「規制」に沿ったやり方であります。このやり方は、「経済学」と



いう共通語がないため、国際社会では通用しません。今は、日本にルールが持ち込めるか、あるいは日本がルールを作れるかが問われている時であります。このような様々な問題を契機として、今は、日本が変化するチャンスであると思っています。

東西の冷戦構造が終わり、核の恐怖が薄らぐと、次に出てきた問題が、地球環境問題です。これは、国レベルの問題から、一人一人の意識の問題へ変わることの意味します。このことは、人間の生き方、発想の仕方が大きく変わる可能性があることを意味します。これにより、人類の将来の可能性が、非常に大きくなってきている状況にあると思われます。また、人類生存のための地球環境問題の解決は、技術開発のテンポを進めることにもなります。この技術開発の推進役は、かつての核兵器時代における米ソではなく、日本でも出来る、いや、むしろ日本がトップランナーにならねばならない時代に来ています。そういう状況の中に、今、我々がいることを認識する必要があります。

可能性というのは、大きな変化から生まれるものであります。我々が、今、大きな変化の中にいることを自覚しなければ、せっかくの機会を失うことになり、新たな人類の可能性をさぐるチャンスを失ってしまうことになるのではないのでしょうか。

(文責 土木学会関西支部幹事)

■火砕流について  
 京都大学理学部火山研究施設  
 助教授 和田 卓彦

雲仙・普賢岳の噴火によって、火砕流が close up されたが、もともと、火山活動の複雑な様相を記述するのは、難しい仕事の一つである。幸い視聴された映像を前提にできるので、多少とも楽になったと考え、そのつもりで筆をとった。とは言っても、物理系の私にとって、殆どが地質学者によって記述されてきた火砕流の論文はかなり手間どる仕事であって、かなり難渋したことを告白しておく。

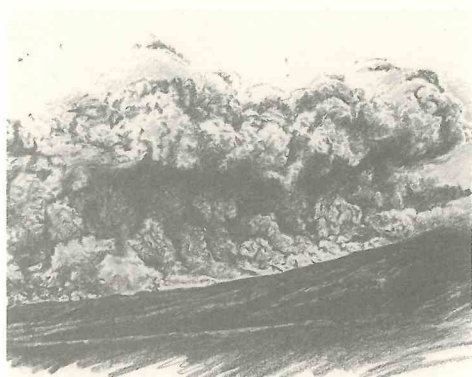
まず“火砕”という難しい言葉が問題であって、非常に大雑把に考えると（地質学の基礎はあくまでも堆積した層の調査であって、それを基にしてその地質の由来を探るということを念頭において）、溶岩シート以外の火山噴火によって放出されたものの総称であるらしい。火山灰、火山礫、火山岩塊 etc. 色々のものがある上、その堆積の状態、等々から、つまり火山碎層物 (pyroclastic deposits) からその由来を推定するのである。したがって、直接火山活動が判っていない先歴史時代では、研究者によって議論が分かれるところらしい。火砕流 (pyroclastic flow) はその代表的あるいは、特異な形式であると考えてよい。

以上の考察がなされる契機となったのは、西インド諸島の Martinique 島 Mt. Pelée の 1902～1903年の噴火の観察からである。この有名な火山噴火では、猛烈な火砕流が見事に

写真に撮られていて、一方ではこの火砕流で麓の町 St. Pierre の 29,000 人の人々が一瞬のうちに犠牲になったという悲惨さによって、強く研究者を刺戟したのであった。

当然のことであるが、火砕流となって駆け下る様子は、見事に把握されていても、火口から山の斜面に至るまでは、記述によるつまり観察による他はなかった。それによると、よく言われるような溶岩ドームの崩壊ではなく、pyroclastic な各種の particles と gas の高い密度のエマルジョンが“黒雲”（高密度で光を通さない。勿論高い温度のため夜間は赤いであろうが）となり、直接山の斜面へ飛び、それから火砕流が始まると考えられてきた。その後、Mt. Pelée の経験は、むしろその特異な溶岩尖塔の代表として知られてきたように思われる。それは驚くなかれ 300m も針のように暫時は突出していたもので、見事な写真を見られた方もあるであろう。つまり、火砕流の方は減多に見られないものであるから、研究対象とはならなかった、もしくは十分な資料がなかった状態がつづいた。

1974年の New Zealand の Ngauruhoe 火山の活動の時には、溶岩ドーム崩落と火砕流が全く別の方向に発生している記録が見事にとらえられているが、前者は果して火砕流と言えるかどうか、やや疑問があるほどであるし、



斜面を駆け下る Mt. Pelée の火砕流

どうやら“黒雲”と思われるものが火口のすぐ上に出ている写真もまた示されている。ここでは溶岩ドーム崩落は pyroclastic avalanches (火砕なだれ) と別個に記述されてあることも事実である。雲仙のような場合、今のところ同じ方向 (水無川の谷筋) へ発生するので区別は難しいが、“黒雲”の発生と同時に溶岩ドームが若干崩落した場合の火砕流と考えるべきではなかろうか? どうも溶岩ドームを構成する物質は、火砕流に成り損なった、その条件から逸脱したものではなかろうか? 条件とは、多分含水量、温度、勿論構成成分 (殆どが  $\text{SiO}_2$  成分比の高い酸性の安山岩の場合が火砕流の発生と関係している) であるが、これを確定するのは多分相当困難なことであろう。それよりも、高温高压の particle/gas のエマルジョンが、“黒雲”として暫時でも安定しているのをどう説明するかは難問である。

温度については Mt. Pelée の場合、その被害の調査から  $800^\circ\text{C}$  とされているが、筆者は、それならば軽石流 (pumice flow) となるのではなかろうかと思っている。軽石は、 $\text{SiO}_2$  が  $800^\circ\text{C}$  では爆発的にガス化して、いわばポップコーン状になると言われているからで、多分いわゆる火砕流はそれよりは相当低い温度の方がもっともらしいと思う。それよりも防災上重要なのは、被害というのは、高速で通過



Ngauruhoe 火山の黒雲

するため、高温の被害よりも爆風圧によるものの方が強いらしいことである。高熱の被害はどうやら火砕流の先端部付近の方が大きいらしいことであろう。

火砕流の難問の一つは高速な滑落の問題で、多数発生した Mt. Pelée の場合  $20\text{m/s}$  から、 $120\text{m/s}$  までの記述がある。最近、実験と計算によって、幾つかのサイズと形状表面の凹凸及び空気の抵抗を考えた model で、どうやら gravity-controlled が妥当であることが示された。それによると落差  $500\text{m}$  程度で落下スピードは最大となり、それ以上では速くならないらしい。しかし、斜面での摩擦抵抗が小さくなるという難問は未だ解決されていないので、全体としてわけのわからない状態にある。防災上重要なのは火砕流の量であるが、Mt. Pelée では  $0.1\text{km}^3$  の体積といわれているし、到達する距離は  $20\text{km}$  にも及ぶといわれている。勿論先歴史時代のものについては遥かに大きい値が求められているが、そのような大噴火の場合はむしろ火砕流だけの問題ではない (ピナツボ火山のように) ので、敢えて省略しておく。与えられた語数では十分な記述は不可能と思われる。その点はお許し頂きたい。

フォーラムシビルコスモス活動報告  
FCCW代表 沖村 孝

10

関西支部では昨年の「土木の日」記念行事の一環としてフォーラムシビルコスモス（略称：FCC）を発足させました。これに関しましては学会誌等で紹介させていただきましたが、フォーラム構成員が限られていることもあり、一般会員の皆様方に、一層ご理解いただき、かつまたこのフォーラムに会員の皆様方から積極的なご意見をいただくため、以下に少し詳しく経過を紹介させていただきます。

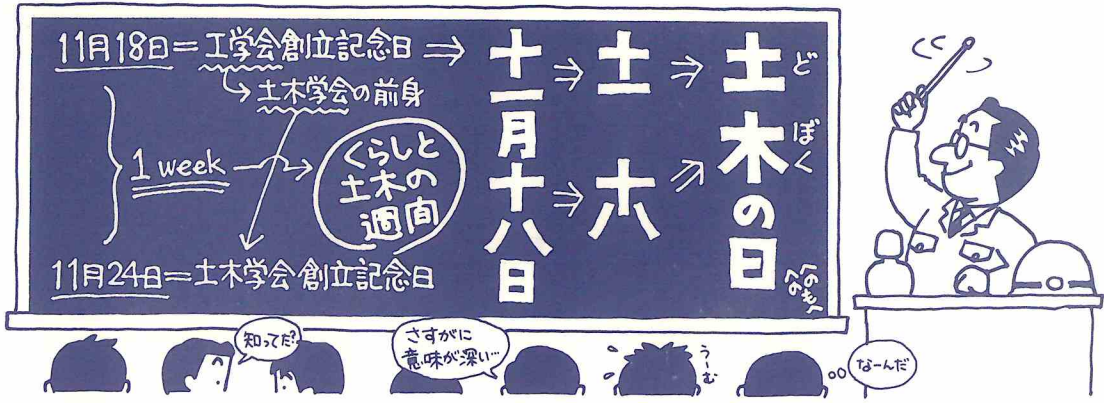
土木学会は昭和62年度より「土木の日」を11月18日と定め、それに続く一週間を「くらしと土木の週間」として土木広報活動を行ってきております。このような活動を開始する背景は社会資本の整備、充実の推進のみならず、近年の土木界を取り囲むさまざまな問題、例えば建設市場の国際化、建設業界の体質改善、建設労働者の払底、若者の土木という職業に向けての求人力の衰えなどの問題の顕在化に対応するためでもあります。広報活動は、土木の技術や業務に対する理解の不足、土木のビジョンのアピール不足などに取り組むために開始されました。

すでに官あるいは産においてもその重要性が認識され、それぞれの分野で積極的な取り組みがなされ、事業所、工事フェンス等の改善あるいは土木施工機械等の展示を通じた取り組みがなされ、それなりの成果をあげてきております。

しかし、今までの活動は官あるいは産のそれぞれの立場で独自に実施されることが多く、土木界全体として問題点の解決を話し合い、また討論する場が今までは残念ながら存在しませんでした。

このため、関西支部では「土木界が抱えるさまざまな問題の解決をめざして、21世紀の社会資本整備を円滑に実施し、豊かな国土づくりを進めるためには、土木界がいかにあるべきかを議論し、また、そのための情報の発信・受信基地となる場」を提供するため、産、官、学のみならず広く市民をも交えた組織を設立いたしました。これがフォーラムシビルコスモスであります。

このFCCは問題点の解決策を提示するためのものでなく、広く会員の皆様方にも参加いただきながら、問題点解決のための討論を通じて、解決策を探っていこうとするものであります。このため、当面はフォーラム構成員を限定し、この方々にまずご意見を伺い、それを会員の皆様方に広くお伝えし、さらには会員からのご意見をいただきながら議論を深めることといたしました。現在のフォーラム構成員は関西における各種機関、企業のトップクラスの方々、および市民として文化人の方々をお願いしております。なお、具体的な活動はFCCの下部組



織として構成されたワーキンググループ（FCCW）によって企画され、実施されるものであります。

昨年11月19日の発会式では、作家の田村先生から「醜いKを自ら売り込まないで、感動のKを売り物にしないで。」とのご意見をいただいたり、電通の中尾部長からは広報の三要素（デザイン、システム、コミュニケーション）のお話を伺うことができました。また、広報の技術論ではなく、「土木のボランティア精神を長期的に展開すること」が基本的に必要なのではないかとの意見も出されました。この時の議事録（発言録）は支部の方で保管しておりますので、興味のある方はお申し込み下さい。

発会式で出されました意見や考え方を、会員の皆さんや市民の方々とも一緒に考える場として、本年2月5日には「魅力ある土木をみざして」というフォーラムを120名の参加を得て開催いたしました。そこでは市民の方々から、土木屋はもっと自信をもって自分達の仕事を広報すべきであるとの積極的なご意見をいただきました。また、将来の土木を魅力あるものとするためには、(1)土木界の国内外のネットワークを活用したPR、(2)ODA等による開発途上国への協力、貢献の重視、(3)女性の活用、(4)長期を見通したビジョンの確立等の提言がなされました。

本年度に入り第1回のFCCが6月11日に開かれました。そこでは土木の理念についての討論が行われました。話題提供者の竹内前支部長や吉川前副支部長からは、土木が抱える問題点の背景の一つとして、「土木の仕事が建築に比して没個性であること」の指摘があり、「今後土木を活性化するためには選択肢を多くし、創造的な場が多く与えられねばならないこと」が強調されました。このフォーラムに関しましても、議事録（発言録）を準備中でありますので、ご希望の方は支部の方へご請求下さい。

活動部隊としてのFCCWは、FCCと会員の皆様方との橋渡しの役をするためのものです。本報ではFCCの設立の由来と2～3の活動を紹介するとどめましたが、今後は多くのテーマを設定し、土木界の現況と将来に関する積極的な広報活動をはじめとして、フォーラム、見学会あるいはシンポジウム等を通して我々が抱える問題点を時には我々自身で、またある時には市民の方々とともに考えてまいりたいと思っております。会員皆様の積極的な参加を期待しております。

（神戸大学工学部助教授）

## 橋のなんでも小事典

—丸木橋から明石大橋まで—

土木学会関西支部編／渡邊英一、一ノ瀬レイザ  
伯子、田中充子、田中輝彦、西村宣男、古田均、  
松村博、保田雅彦著

講談社ブルーバックス総327頁 定価800円

地中深く埋められて人々から見られることもない基礎、暗渠、トンネル、ライフラインなどの多くはひっそりと、しかし確実に人々の暮らしの礎を築きあげています。

そのような土木構造物の仲間に橋があります。橋は人々の目に直接ふれますし、決して地味とはいえない存在です。写真-1はレオナルド・ダ・ヴィンチによる「モナリザ」の絵ですが良く見れば彼女の左肩越しにゴールデンホーン橋という夢のアーチ橋が描かれています。このように、橋は古くから伝説、物語、絵画、絵巻物や写真の対象となってきました。

橋にはすべからず大小があり、科学の粋を集めた巨大なものから名もなくひっそりと架けられたものまでありますが、とにかく、私達が毎日の暮らしの中でもっともよく利用する土木構造物です。たとえ、行く手に谷、線路、道路、川、あるいは湖沼があっても橋のおかげで簡単に越えることができます。そんなことから、橋は昔から人々の生活圏を形成する上でなくてはならないものであることがわかります。大き

## ■橋のなんでも小事典

—丸木橋から明石大橋まで—

な橋は隣の地域、文化圏との境界を一跨ぎすると同時に、ひとびとにとって驚異の建設物であり、また、友好善隣の施設でもありました。

地球上には一ヶ所として同じ風景はありませんが、橋もまたしかりです。その立地している地域、地形、歴史、風土などの環境はいうまでもなく、長さ、大きさ、高さ、形式、材料、線形、断面形、色、橋齢は実に多種多様です。ひとびとの橋に対する愛着もひとしおのことでした(例えば、写真-2は日本の人々に最も親しまれている橋の一つ、錦帯橋を示しています)。

ところが、このような、素晴らしい橋こそ土木の世界であるということを一般の人々には認められていないようです。建築屋さんがつくるのだろうなどと思われるようなのです。土木は元来、寡黙な職人の世界であり、土木技術者達はその魅力を一般の人に語る機会がほとんどなかったからのようです。

土木学会関西支部は豊かな社会への認識の高まっている今こそ、一般の人々とのコミュニケーションをはからねばならない時と考えました。この本の目的は土木の意義を一般の人々に分かりやすく紹介し、また、若い人々に胸を張ってこの道へ進んでもらうため声を大にして訴えたのです。したがって、内容も単なる橋梁工学の範疇にとどまらず、広く橋の芸術、歴史、風土、文化、文学、経済、科学、安全性、技術にわたって紹介につとめました(例えば、ハン

ガリーの首都でドナウの薔薇といわれるブダペストのセーチャーニ橋(写真-3)。

8人の著者の中には多くの著書で知られた市役所に勤める橋の物知り博士、意匠デザインの女性学者、外国籍の女性橋梁技術者、橋梁工学や構造力学の学者、以前から土木紹介の著書もある建設会社の技師、そして公団で大きな橋を手がけてきた専門家が含まれています。

つくづく感じましたことは、力学を平易な言葉で紹介することの難しきでした。でも土木学会関西支部の一般書刊行の幹事の方々の熱情はまさに執筆者達を凌ぐものがあり、遅くまで討議を重ねてきましたし、家に帰ってから奥さんなどにも原稿に目を通して頂き、読み易い一般書にするためご尽力いただきました。おかげで出版社の原稿の手直しも軽微でした。

(渡邊英一 京都大学工学部教授)



写真-2 錦帯橋



写真-3 ブダペストの象徴、セーチャーニ橋

「橋のなんでも小事典」のカバーイラスト

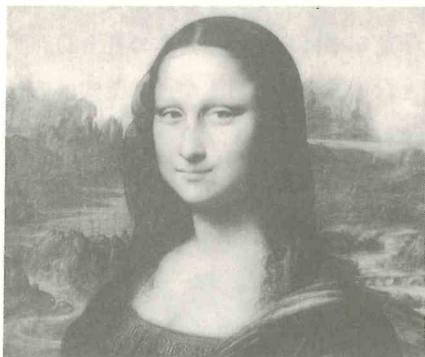
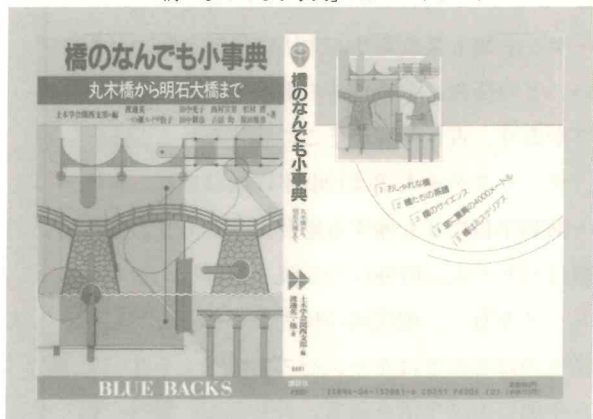


写真-1 レオナルド・ダ・ヴィンチによる「モナリザ」とゴールデンホーン橋



■英国・ランカスターにて  
 大阪市立大学  
 小林 治俊

What is your name? My name is Chihiro…  
 恐る恐る小学2年生の末娘が答えると、おお良  
 くできました、早速これから授業を受けてみま  
 すか?とMiss Woodward校長先生がにこやかに  
 娘達に語りかけて下さるところから、家族5人  
 の英国生活が本格的に始まった。私が文部省在  
 外研究員としてランカスター大学 (University  
 of Lancaster) に赴いた3年前の事である。

ロンドンから400km、特急で3時間の北西イ  
 ングランドの都市ランカスター、その北には田  
 園詩人ワーズワースの詩、そしてピーター・ラビ  
 ット物語の故郷として知られる湖水地方 (Lake  
 District) があり、南には産業革命の故郷マンチ  
 ェスター、さらにビートルズの故郷リバプール  
 も近い。中世バラ戦争の拠点であり、一昔前には  
 ランカシャーの羊毛でも知られたが、現在は  
 その面影はなく、外観にもローマ時代の城が市  
 街を見おろしている以外は特に目立った特徴は  
 ない。しかし、町はよく整備され、青空市場やマ  
 ーケット類も多数あり、生活には何も問題はない。  
 どの街角にも特色ある看板を出しているパ  
 ブがあり、古き英国がそこに感じられる。

ランカスター大学は1964年に創設され、音楽  
 ・演劇学科なども擁する総合大学であり、学生  
 数は約五千人。町外れの丘陵一帯に広大なキャン  
 パスを有し、現代風の校舎が立ち並んでいる。  
 学生のほとんどはキャンパス内のドミトリーで  
 3年間の大学生生活を送る。もちろん、銀行、郵

便局、スーパーマーケット等があり生活には困  
 らない。アスレチック、温水プール等のスポ  
 ツ施設で汗を流し、パブで一杯の後はスロット  
 マシンやビリヤードで遊ぶもよし、気分を変え  
 ての映画、コンサート、演劇鑑賞には一流所が  
 目白押しにスケジュールされておりそのチケッ  
 トも廉価である。

英国を旧宗主国とする国々からの留学生が多  
 く、特に大学院の学生にそれが目立つ。授業料  
 は年間約百万円で、英国およびEC諸国からの  
 学生の3倍である。ご他聞にもれず英国も大学  
 予算の削減が進み、大学は独自の金策をたてる  
 ことになる。その一つは留学生を多く集めるこ  
 とで、一年の短期留学生も多い。幸い英国には  
 英語という無尽蔵の資源がある。これを元手に  
 年中英語研修のカンファレンスを催しており、  
 国際色豊かな集団を見かけることになる。

学生はレポートの作成・授業での討論に戦々  
 恐々の毎日で、とにかくよく勉強するようだ。  
 英国の大学進学率は8%で、大卒の社会的評価  
 がわが国とは違う事情もあるが、卒業式はそれ  
 は盛大に挙行され、教員・学生双方が喜びに満  
 ちあふれ、出席の家族とともに学生の巣立ちを  
 祝福する。大学  
 名誉総裁アレキ  
 サンドラ王女が  
 一人ひとりに学  
 位記を手渡され



市の中心、マーケット街

ランカスター大学全景



るとともに、声をかけておられたのが印象的であった。

さて、冒頭に述べた二人の娘は小学校、長男は中学校にと現地校に通うことになったが、すぐに友達ができ、tea party、birthday party 等々に呼ばれたり呼んだりの日々が帰国まで続いた。周囲の暖かい援助のもとに授業、各種の学校行事、スポーツにと楽しくやれたようだ。小学校には通知表や修了証もなく、中学校では全教科の先生が書かれたrecommendationがそれに代わる。その内容は、いかに努力したかを主眼にして書かれている。特筆すべきは、英語力のない長男が困らぬようにと教育委員会は、長男の授業に付添う先生を特別に雇い、長男がこの先生とともに授業を受けることが出来たことである。むろん無償である。わずか9ヵ月滞在の外国人にこのような恩恵を与える英国社会のあり様に、市民生活の歴史と伝統に培われた英国の力量を感じずにはいられない。滞英中に報道された各種ジャパニーズスキャンダル、昭和天皇ご崩御関連、日本企業の進出など根強い対日批判もあるが、英国人は質素な日常生活と花を愛する人々であり、その英国に関する僅かな新聞記事にも懐かしさを憶える。帰国当時、断片的な英語の独り言をつぶやいていた末娘をはじめ子供達にとって、ランカスター生活はどのような感慨をもたらしたのであろうか。いつの日か家族で再訪したいものである。

■広報

●土木学会平成3年度全国大会報告

平成3年9月17、18、19日  
 関西大学を主会場として開催  
 参加者 6,013名  
 第46回年次学術講演会 2,768題  
 特別講演会 2題  
 研究討論会 11課題  
 国際シンポジウム  
 基調講演 2題  
 一般論文発表 42題

懇親会  
 学生懇談会  
 映画会 38編  
 見学会 4コース

市民参加行事

記念講演会 2題 9月16日  
 ガイアート展 京阪神主要鉄道8駅  
 9月13日～19日  
 土木系高校生現場見学会 参加校19校  
 学術振興基金作品展 7題  
 9月18日 関西大学

●技術革新講演会

平成4年1月17日(金) 13:30～16:50  
 なにわ会館  
 題目 2題

●会員懇親会

平成4年1月17日(金) 17:00～  
 なにわ会館  
 参加費 5,000円  
 満40才(昭和26年生れ)の方招待

●施工技術報告会

平成4年1月23日(休) 9:30～17:00  
 建設交流館  
 参加費 5,000円

■編集幹事 阿部、綾、中谷、宮本、山内



編集・発行  
社団法人 土木学会関西支部  
大阪市中央区船場中央2丁目1番4-409号  
TEL.06-271-6686 FAX.06-271-6485

